

スポーツとICTを通じた支援活動で 地域の復興と活性化をサポート

Efforts of Enterprises X The future of Tohoku

富士通株式会社



「ふる川田プロジェクト」では、川崎フロンターレの選手たちも公式戦の合間を縫って駆け付け、地元の人々と交流しながら、かかしづくりや鳥除けのネット張りの作業などを行いました。チームにとっても陸前高田は「もう一つのホーム」とも言える、特別な場所となりました。

情報システムの復旧や各分野でのICT（情報通信技術）を活用したシステムづくりで被災地の復興を支援してきた富士通。同社がメインスポンサーであるサッカーJ1チームの「川崎フロンターレ」が継続する岩手県陸前高田市の復興支援活動への関わりを通して地域交流の側面からも東北の復興に貢献しています。

支援を続け4年半が経過した2015年秋、大きな動きがありました。陸前高田市と川崎フロンターレの友好協定「高田フロンターレスマイルシップ」

「支援」積み重ね「交流」へ 市とチームが友好協定締結

「陸前高田の子どもたちへ教材を」
1通のメールからつながった絆

富士通がメインスポンサーを務める川崎フロンターレは、震災直後から現在まで陸前高田市への復興支援活動を通して、地域の人々との関係を深めてきました。始まりは1通のメールからでした。津波被害で子どもたちの学習教材が不足していた陸前高田市。「勉強用の教材の数に余裕があれば譲ってほしい」と陸前高田市の小学校の先生から友人である川崎市の小学校の先生に連絡が入りました。「その先生が、クラブがつくっている『川崎フロンターレ算数ドリル』を送れないかとチームにメールをくださった。そこで当時のスタッフが800冊のドリルとサッカーボールを車に積み、自ら運転して現地へ向かったんです」と話すのは、川崎フロンターレサッカー事業部タウンコミュニケーション部の若松慧さん。それを機に、子どもたちのサッカー教室、陸前高田市の子どもたちを等々力陸上競技場でのホームゲームに招待する「かわさき修学旅行」など現在も続く活動が始まりました。



2011年9月から始まった選手会主催のサッカー教室は、現在も年1回の開催を継続。地域の子どものつながりは年々深まっています。

「スポーツで広がる交流
富士通グループで
支援を継続」

19年の春には、「ふる川田プロジェクト」もスタート。陸前高田の農家から借り受けた田んぼに、チームマスコット名をもじって「ふる川田」と名付け、そこで収穫したコメを使って地元酒造会社でチームのオリジナル酒を造る企画です。選手、サポーター、スタッフが地元の人たちとともに米づくりに参加。秋に出来た日本酒約1600本は「青椿（あおつばき）」と命名して販売されました。「交流を続けてきた中、現地の方のアイデアから形になるものが生まれ、一段と強い絆ができた」と感じています。今年も若松さん。今年も作付面積を増や

「支援」積み重ね「交流」へ 市とチームが友好協定締結

「陸前高田の子どもたちへ教材を」
1通のメールからつながった絆

富士通がメインスポンサーを務める川崎フロンターレは、震災直後から現在まで陸前高田市への復興支援活動を通して、地域の人々との関係を深めてきました。始まりは1通のメールからでした。津波被害で子どもたちの学習教材が不足していた陸前高田市。「勉強用の教材の数に余裕があれば譲ってほしい」と陸前高田市の小学校の先生から友人である川崎市の小学校の先生に連絡が入りました。「その先生が、クラブがつくっている『川崎フロンターレ算数ドリル』を送れないかとチームにメールをくださった。そこで当時のスタッフが800冊のドリルとサッカーボールを車に積み、自ら運転して現地へ向かったんです」と話すのは、川崎フロンターレサッカー事業部タウンコミュニケーション部の若松慧さん。それを機に、子どもたちのサッカー教室、陸前高田市の子どもたちを等々力陸上競技場でのホームゲームに招待する「かわさき修学旅行」など現在も続く活動が始まりました。

その中でクラブ創設20周年と震災から5年という節目が重なった16年夏に開催されたのが「高田スマイルフェス2016」です。陸前高田のグラウンドで行われた「ベガルタ仙台」などの親善試合や賛同したミュージシャンらによるステージ、被災地の物産品販売など、1日だけのイベントに、地元のほか川崎や仙台などから約3000人の来場者が訪れました。

「スポーツで広がる交流
富士通グループで
支援を継続」

19年の春には、「ふる川田プロジェクト」もスタート。陸前高田の農家から借り受けた田んぼに、チームマスコット名をもじって「ふる川田」と名付け、そこで収穫したコメを使って地元酒造会社でチームのオリジナル酒を造る企画です。選手、サポーター、スタッフが地元の人たちとともに米づくりに参加。秋に出来た日本酒約1600本は「青椿（あおつばき）」と命名して販売されました。「交流を続けてきた中、現地の方のアイデアから形になるものが生まれ、一段と強い絆ができた」と感じています。今年も若松さん。今年も作付面積を増や

す予定で、今後の展開に期待が高まっています。

富士通で復興支援活動を行っている西美生シニアマネージャーは「弊社社員もフロンターレの活動に多数参加しています。フロンターレが被災地で多彩な活動していることは富士通としてもたいへん心強い」と力を込めて話します。そして、富士通グループでもICTを通して復興支援活動を継続しています。陸前高田市の「まち・ひと・しごと総合戦略策定会議」に西さんが参画して地域活性化に貢献。また、震災直後から石巻市の病院を支援してクラウドを活用した新たな在宅医療のシステムを開発するほか、岩手・宮城・福島3県の親子延べ1000組以上が参加した「震災復興支援家族ロボット教室」を開催しました。

富士通はICTを通して復興支援を、フロンターレはスポーツを軸に多彩な支援活動を継続。今後も富士通グループとフロンターレが一体となって東北の未来を拓いていくことを目指しています。

「陸前高田の子どもたちへ教材を」
1通のメールからつながった絆

富士通がメインスポンサーを務める川崎フロンターレは、震災直後から現在まで陸前高田市への復興支援活動を通して、地域の人々との関係を深めてきました。始まりは1通のメールからでした。津波被害で子どもたちの学習教材が不足していた陸前高田市。「勉強用の教材の数に余裕があれば譲ってほしい」と陸前高田市の小学校の先生から友人である川崎市の小学校の先生に連絡が入りました。「その先生が、クラブがつくっている『川崎フロンターレ算数ドリル』を送れないかとチームにメールをくださった。そこで当時のスタッフが800冊のドリルとサッカーボールを車に積み、自ら運転して現地へ向かったんです」と話すのは、川崎フロンターレサッカー事業部タウンコミュニケーション部の若松慧さん。それを機に、子どもたちのサッカー教室、陸前高田市の子どもたちを等々力陸上競技場でのホームゲームに招待する「かわさき修学旅行」など現在も続く活動が始まりました。

「陸前高田の子どもたちへ教材を」
1通のメールからつながった絆

富士通がメインスポンサーを務める川崎フロンターレは、震災直後から現在まで陸前高田市への復興支援活動を通して、地域の人々との関係を深めてきました。始まりは1通のメールからでした。津波被害で子どもたちの学習教材が不足していた陸前高田市。「勉強用の教材の数に余裕があれば譲ってほしい」と陸前高田市の小学校の先生から友人である川崎市の小学校の先生に連絡が入りました。「その先生が、クラブがつくっている『川崎フロンターレ算数ドリル』を送れないかとチームにメールをくださった。そこで当時のスタッフが800冊のドリルとサッカーボールを車に積み、自ら運転して現地へ向かったんです」と話すのは、川崎フロンターレサッカー事業部タウンコミュニケーション部の若松慧さん。それを機に、子どもたちのサッカー教室、陸前高田市の子どもたちを等々力陸上競技場でのホームゲームに招待する「かわさき修学旅行」など現在も続く活動が始まりました。

「陸前高田の子どもたちへ教材を」
1通のメールからつながった絆

富士通がメインスポンサーを務める川崎フロンターレは、震災直後から現在まで陸前高田市への復興支援活動を通して、地域の人々との関係を深めてきました。始まりは1通のメールからでした。津波被害で子どもたちの学習教材が不足していた陸前高田市。「勉強用の教材の数に余裕があれば譲ってほしい」と陸前高田市の小学校の先生から友人である川崎市の小学校の先生に連絡が入りました。「その先生が、クラブがつくっている『川崎フロンターレ算数ドリル』を送れないかとチームにメールをくださった。そこで当時のスタッフが800冊のドリルとサッカーボールを車に積み、自ら運転して現地へ向かったんです」と話すのは、川崎フロンターレサッカー事業部タウンコミュニケーション部の若松慧さん。それを機に、子どもたちのサッカー教室、陸前高田市の子どもたちを等々力陸上競技場でのホームゲームに招待する「かわさき修学旅行」など現在も続く活動が始まりました。



川崎や仙台からのツアーも生まれ、約3000人が訪れた2016年の「高田スマイルフェス」。富士通からも多数の社員がボランティアスタッフとして参加し、イベントの成功を支えました。

写真提供：川崎フロンターレ(3点とも)

FUJITSU

富士通株式会社
https://www.fujitsu.com/jp/

